
An Earnest Desire

ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n E a r n e s t D e s i r e

【Nコード】

N 8 4 4 4 E

【作者名】

ちい

【あらすじ】

コナンのCD第3弾に触発されて書き始めてしまいました汗1話1話が短編になっていて各話につながりはありません。原作の雰囲気を残しつつ少し進展気味の悲哀もしくは新哀です。このカップリングでも大丈夫！という方は、ぜひ読んでみてください。

翼を広げて（前書き）

コ哀ですが、付き合ってるとかではない（と思います）です。

翼を広げて

いつものように探偵団と一緒に海へ出かけた。

「ったく海なんて…」

と言っていたコナンも実際行ってみると本当の子供たちと変わらない様子で遊んでいて。

結局、こんなところで年齢不相応な雰囲気をかもし出しているのは哀だけで。

「おい、こら」

突然顔に水をかけられ、思わず哀は目をつぶった。

「何よ」

「こういう時くらい子供らしく遊べよな」

「あら、あなただつて来る前は面倒がつてたじゃない」

「あれ？そうだっけ」

そこはしっかりしらばつくれた。

「あのなー、そうじゃなくてな。お前が海入らずにこんなところにいるせいで、みんな心配してるんだぜ。本当は海嫌いなのに無理して来てるんじゃないかってな。こっちとしても、前みたいに日射病になられたら困るしな」

そう言ったコナンに声は真剣でいて、それでいて遊んでいるような雰囲気を含んでいた。

哀はその声から逃れるかのように下を向いて言った。

「別に、そういう訳じゃないんだけど…」

「だろ？だつたら行こうぜ、ほら」

そうやって手を差し出すコナン。
その手を見て、哀はコナンをにらんだ。

「海くらい一人では入れるわ」

そついうと一人立ち上がり、海にいる歩美たちの元へと歩み寄った。

向こうからは、3人（特に歩美）が喜んでいる声が聞こえる。

コナンはその様子を見つめ、

「マジで可愛くねー」

とつぶやくと、満足そうな笑みをこぼし、自身もそこへ向かった。

翼を広げて旅立ってみよう
きつと応援してくれる君がいるから

翼を広げて（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
なるべく定期的に更新しようと思うので、これからもよろしく願
いいたします。

ちなみに最後の2行は哀ちゃんの台詞です。

七つの海を渡る風のように（前書き）

なんかもう、歌とあんまり関係ない気がしますが、暖かい目で見て
やって下さい汗汗

本当にすいません；；

内容は哀↓コもしくは哀+歩といったところだと思います。

七つの海を渡る風のように

いったい何度、あなたに助けられただろう？
どれほど、救われただろう？

「哀ちゃん、今度の日曜、歩美の家に来ない？」

歩美は哀をそう言っただけで誘った。

「ええ、かまわないけど。でも、どうしたの、いきなり」

哀は意外そうに尋ねた。今までは遊ぶといつても、外か博士の家ばかりだったからだ。

「だってー、たまにはわたしの家にも遊びに来てほしいもん。他のみんなも来るんだよ！」

そう言っただけで笑う歩美はとてもまぶしく、可愛かった。

「わかったわ。約束ね」

哀がこう言っただけで、歩美はさらに笑顔になった。

「うん、約束！」

そう言っただけで、半ば無理やり“指きりげんまん”をして去っていった。

今日は、その日曜日。

他の人たちとは歩美の家で会う約束になっていたのに、哀は一人でマンションへ向かった。

「よっ」

マンションの前に着いて、歩美の家のある上の階へ向かうとした時、声をかけられたので、振り向くとそこにはコナンがいた。

「あら、工藤君」

「歩美ん家行くところだろ？」

「ええ」

突然現れた（目的地が同じだから当たり前だが）コナンに、正直哀はほっとしていた。

歩美と約束したあの日。

そう、歩美は本当に楽しみにしているらしく、あの日以来毎日哀のところへ寄ってきた。

そのたびに哀は思っていたのだ。

“本当に私なんかと遊んで楽しいのかしら？”

子供っぽくない言動が多い事は自覚していたから。それでいて、それを直そうともしていないから。

だから、自分と遊ぼうと思ってくれるのが不思議だった。

その優しさが、暖かすぎて火傷しそうだった。

“それでも…”

哀は思う。

“それでもここに入られるのは、この人の存在があるからだろうと。”

“振り向くといつも君がいるからだ”と。

隣で何か考えている哀を見て、コナンは怪訝な顔をしていた。が、哀はその顔を見てクスツと笑うと何も言わずに、歩美の家へ向かう扉へと歩き出した。

コナンは“おい、待てよ”そう言って哀を追いかけてきた。

哀は、後ろからコナンの気配を強く感じていた。

“いつか”はいつか分からないけど、
ずっと、強く君を感じていたい。

七つの海を渡る風のように（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

何かもう内容意味分かんなくてごめんなさい（ペコッ
もっと分かりやすい文章書けるように努力いたします。

ゆるぎないものひとつ

「じゃあまた明日ね、哀ちゃん、コナン君」

「お気をつけて」

「じゃーなー」

「おう、気をつけるよ」

「またね」

いつもの帰り道、いつもの分かれ道で満面の笑みで元気良く手を振って帰っていく友達に、笑顔を見せ、小さくではあるが手を振り、同じ方向に帰る彼とまた歩き出す。そう、いつもの風景だ。

しかし、この後いつも哀は胸に小さなわだかまりとでも言うべきものを抱えている気分になる。別に、会話に困るわけではないし、ましてや彼を嫌っているわけでもない。

こんなことを考えている今でさえも、哀はコナンと何かしらの会話をしているのだから。

“何故妙にブルーな気持ちになるのか”

幾度となく自らに問いかけてみた。問いかけるたびに哀は自嘲気味に笑う。

“そんな事、分かりきっているじゃない”

哀はもちろん、とでも言うべきか、コナンに色々な事を伝えていないのだ。つまり、コナンがほしいと思っている情報、そう、組織についての事を、だ。

自分が知っている事を全て彼に話してしまおうかと思った事もあつ

だが、好奇心旺盛な彼なら、言った途端に“そこ”へ言ってしまうだろう。

そう思つて、言う事は出来なかった。しかし、それでも彼が欲している事を、自分は知っているのに彼に提供できない。

そう、これが小さなわだかまりの正体なのだ。

“まあ、彼もわたしに色々と隠してるみたいだし、お互い様なんだけど…”

色々な事を考え、コナンといたい何の会話をしていたのかも分からないまま、分かれ道まで来たらしい。

「ん、じゃーな。ちゃんと寝んだぞ」

哀が夜行性であることは周知の事実だ。その事を知って、コナンはあえて皮肉のように言ってくる。皮肉ではない事は、哀が一番良く知っているのだけれども。

哀は、チラッとコナンを一瞥すると、さようならも言わずに、スタスタと自分の家の方に歩き出した。後ろからは、“ったく”などと言っているコナンの声が聞こえるがお構いなしだ。

“ほらね、彼に言いたい事は何も言っていな。全部ウラハラなんだから”

夜になつても哀は眠る事が出来なかった。

自分の行動に嫌気がさし、その事について考えていたからだ。

だがそのうち、そんな事を考える事にも嫌気がさし、哀は布団を頭からかぶり、ようやく眠りについた。

哀は、夢を見た。

自分が何かをつかんでいる夢。それが何かを確かめようとしたけれど、何故だろう、どうしても見る事が出来ないのだ。

しかし、哀は、それを捨ててしまおうとは思わなかった。そこから何か、温かさを感じていたからだ。そう、まるで、久しぶりにお姉ちゃんに会ったような…。はたまた記憶がほとんどなく、あるのはテープの中の声だけであるお母さんに会ったような…。どちらももう会えるはずのない人なのに、とても懐かしくて温かい。そんな感じを受け取っていた。

結局、夢の中の自分がかんていたものがいったい何であつたのか、哀はついに知り得ることが出来なかった。しかし、夢から覚め、自分が何もつかんでなどいない事を確認した後でも、哀はその何かを離したくない、離さないでいようと思った。その、何かゆるぎないものをひとつ。

朝、学校に着いた。

きつと誰も、昨日と今日の自分の小さな変化など、気づきもしないだろう。

その方がありがたい。誰にも気づかれず、自然となじみたいから。手に入れたものをしっかりと自分のものにし、抱きしめたいから。そう思いながら、教室の扉を開けた。

「あ、おはよう、哀ちゃん」

「おはようございます！」

「よー！今日は俺の方が早かったぜ、へへっ！」

笑顔の仲間がいる。そして…

「よっ灰原。ちゃんと寝たか？」

「ええ、おかげ様だね。昨日はごめんなさいね」
さらりと謝る哀。

その珍しい行動に、コナンは驚いた顔をしていたが、
「そっか。なら良かった」
と答えた。

そして…彼がいるから。

こんな自分を受け入れてくれる仲間がいるから。

私も、自分の人生を歩んでみよう。
マイライフ

私の人生なんだもの。

哀は心にそう誓った。

昨日のブルーな気持ちは、もうどこにもなかった。

ゆるぎないものひとつ（後書き）

またもや意味の伝わりにくい文章を書いてしまつてすみませんでした。

もう少しうまく哀ちやんの気持ちの変化を書きたかつたんですけど……もっと努力が必要ですね。

手厳しくてもかまいませんので、アドバイスも含めてた評価、感想がいただけると嬉しいです。

この話に限らずですが、特にこの話はもう少し解釈が必要かもしれませぬね；

読んでいただいて、ありがとうございました。

夏を待つセイル（帆）のように（前書き）

自身初、付き合ってる設定です。

何せ初なので、出来はいまいちかと思われます。すみません。
あ、ちなみに新哀です。

夏を待つセイル（帆）のように

顔のそばを風が通り抜けた。

「今日も良い天気になりそうね」

ベランダに立った哀は誰にともなく呟いた。空が、とても近くに見えるような気がした。

哀はチラツと横を見て、人の気配が全く感じられない隣の家を目をやると、ため息をついた。

「全く、寝る間も惜しんで人のあら探し何て…私には理解出来ないわね」

自分の心の声さえも、言い訳がましく聞こえる。探偵をしていてこそが彼であると知っているから。

「いつてらっしゃい」と言ったのは、一週間も前の事だ。それ以来、連絡はない。

哀は、再びため息をついた。

「ヤッベー！」

新一は焦っていた。

目暮警部に頼まれた事件を解決した後、以前解決した事件の犯人が新一に会いたがっているという連絡が入り、それが旅行中の事件だったため、北海道まで行った。と、そこまでは良かったのだが、これも探偵のサガ。そこでまた事件に遭遇したのだ。それが、北海道で頻発していた連続通り魔だったので、解決に五日も要してしまったのだった。その間、哀には一度も連絡をしていない。

「灰原、怒ってつかない？でも、あいつ無関心かもな…」

新一は自問自答して少しだけ落ち込み、哀に電話をかけた。

ブルルルル

「何か用？」

開口一番、哀はこう言った。

「あ、いや、元気にしてっかなーって…」

「…」

「あの、忙しいならまた後にすっけど…」

ガチャ

電話は切れた。

「やつぱ、怒ってるか…。あー、どうすれば許してくれっかなー？」

新一からの一週間ぶりの電話があった。こらしめる意味も込めて、少し新一をいじめてみようと思ったのだが、それに新一が動揺していることはすぐに分かった。

それに加えて、哀が新一を心配していた気持ちも混ざって、怒っている様になってしまったが、新一には良い薬になっただろう。

哀は、ソファに座って、そんな事を考えていたのだが、いつの間にか眠ってしまった。

突然、何か気配がした。哀がそっと目を開くと、人影が見えた。

“いつの間に寝てたのかしら” そう思いながら体を起こすとそこには…

「あ、起きた？ただいま、灰原」

そこにいたのは新一だった。

「帰ってきたらさ、博士の車ないのにお前ん家電気ついてんだもん。何事かと思ったんだからな」

あまりにもいつも通りのふるまいに、さっきの電話の態度はどうしたのかと少し面白くない気もした哀だったが、そこに彼らしい気遣いがあるのだらうと、自分を納得させた。

それでも、少し固めの声で話す。

「いつ、帰ってきたの？」

「ん？一時間ほど前。そんな時にはお前ぐつすり寝てたぜ」

「…そう…事件、解決できたの？」

「あ、ああ。それ自体はすぐ終わっただけだな…」

新一は哀に事情を説明した。

「本当に悪かったよ」

最後に、そう言っただけだった。

「別に…私、何も思っただけから」

哀はふいつと横を向いてそう言った。

その様子を見て、新一は苦笑した。

“可愛いやつ”

新一は心の中だけでそう思うと、優しく哀を抱きしめた。

いつもなら必ず少しは抵抗する哀がおとなしく抱かれている事が、哀が心配していた事を物語っている。

「なあ、灰原。俺たち反発もしてるしさ、俺が探偵してるせいでオメーに心配っつか、傷つけてつかもしれねーけど、俺、ちゃんとオメーんところに帰ってくるし、これから先も、まっすぐお前んとこ向かうからな」

哀は、その言葉を聞くと、自分の方からもう少しだけ、新一に身をゆだねた。

夏を待つセイル（帆）のように（後書き）

新哀も付き合ってる設定も初めてで至らない所だらけの小説を読んでいた、ありがとうございます。

分からないと言いながら矛盾しているのですが、やった事ない設定の話を書くのは、新たな挑戦のような気持ちになって楽しいです。またどんないろんなものに挑戦していきたいと思います！！
でわ、評価、感想をお待ちしております。
本当にありがとうございます。

D r e a m × D r e a m (前書き)

注意 コ哀、付き合っではない、ラブ要素とかは特にないと思われ
れます、その他のキャラはほとんど出ません。

何か、今までの話色々ネタがかぶってるような気がしてきました
汗汗

D r e a m × D r e a m

「ほら、そういうふうにしてつと子供にしか見えないんだからよ」「いつか、ふさぎこんでいた私に彼が言った言葉。どうしたのかしら、急にこんな事思い出すなんて。」

最近、組織について自分のわかつていること以外にも、色々と調べていた。格別に何かが分かったわけではないが、その事が逆に組織の恐ろしさを強調しているように感じられ、哀はこのところ元気がなかったのだ。

そんな時に歩美に誘われ、少年探偵団のみんなと公園に遊びに来た。やっている事がサッカーなだけあって、自分と似た年齢のはずの探偵は、小学生と遊びに夢中になっている。

哀は、小さくため息をつき、その様子を見ていたのだ。

その時、コナンを除く探偵団のメンバーが、哀に声をかけてきた。

「哀ちゃん、見てばつかじゃなくて、一緒にサッカーやろうよー！」

「そうだぞ灰原。見てるだけじゃつまんねーんだぞ！」

「楽しいですよ、灰原さん！」

哀は少し迷ったが自分の柄ではないと思い、やはり断ろうとした。

「私は…」よし、灰原も交えて試合の続きするか！」

哀の言葉をさえぎったのは他でもないコナンだった。

「『さんせー！』」

もちろん、みんな大賛成である。

「ちょっと、あなた何勝手な事言ってるのよ。第一私サッカーなんてまともにやった事ないわよ」

哀は慌てて、他の人には聞こえないように気をつけつつ、コナンに

言った。

「まあまあ、どうせこいつ等のサッカーなんて遊びみたいなもんだし、ボール蹴ってりやなんかなるって」

哀が非難の意を込めて言ったにもかかわらず、コナンは全く悪びれる様子もなく答えた。

「全くあなたって…」

哀は呆れてそう言ったが、今更やらないと言えるわけもなく…。

「さ、続き始めるぞ！」

コナンが言うや否やみんな走り出していた。

「ほら、灰原も」

コナンは哀にそう笑いかけて、走って行った。哀はまたため息をついたが、しっかりと輪の中に加わった。

結局、かれこれ1時間は走り回っただろうか。

さすがに小学生の体は疲れ果て、時間も5時を過ぎようという所だったので、それぞれ帰る事になった。

それぞれが帰って行き、コナンと哀も家路についた。

「あなたたち、いつもこんなに疲れる事してたのね」

「あん？ああ、ま、あいつら子供だからな。遊びなら何でも楽しいんじゃないか？」

「あら、あなただって楽しんでるくせに」

「ったく、人の事言えるのかよ。何気にお前も楽しんでたじゃないか」

「サッカー小僧のあなたと一緒にしないでくれる？」

哀はいつものように切り替えた。いや、そのつもりだった。しかし、次の瞬間、目を丸くする事になった。

「あ、そうそう、そうやってむきになる顔もいいぜ。ちゃんと子供

に見えるじゃねーか」

突然、コナンがこんなことを言い出したのだ。

「何よ、急に。別にむきになってなんかないわ」

哀は、今度は自分でも少しむきになっていると感じながらも、そう答えた。

「それぞれ、その顔。ずっとそうしてろよ」

コナンはそう言ってまるで本当の子供のように笑った。

「ほら、そういうふうにしてつと子供にしか見えないんだからよ」
いつか、ふさぎこんでいた私に彼が言った言葉を思い出した。あの時も、今も、それからどんな時だって、彼は私に笑顔をくれる。私だけの笑顔ってわけじゃないだろうけど、どう思つかは私の自由よね。

そう思うと、なんだかおかしくなり、哀が一人くすくすと笑った。

「何笑ってんだよ？」

「別に。思い出し笑いよ」

哀が答えるとコナンは少し納得しないような顔をしたが、それ以上追求はしなかった。その代わり、こう言った。

「あ、オメー何か調べるのもいいけど、ちゃんと寝る時は寝ろよ。」

今日みたいなときにちゃんと遊べなかったら、あいつら悲しむだろ」

コナンは全て見透かしたような、得意げな探偵のしたり顔で笑って哀を見た。

「名探偵の説教かしら？」

「別に。俺の独り言」

「そつ、ありがたく受け取っとくわ」

いつものように素直ではない答え方をしてしまったが、こんな、何
て無い事も、きっと小さな幸せなんだろうと、哀は思った。
この姿で居る限り、彼とは共に居なければならぬから。いや、居
られるから。その事を、自分の中の幸せにしよう。
そう思うと、哀は少し楽しく、すごく嬉しくなった。

D r e a m × D r e a m (後書き)

評価感想お待ちしております。

後、第3弾のCD持つておられる方は、第6話(6曲目)のCPの
リクエストも受け付けます♪第6話以降でも、特にこの曲はこのC
Pが良いという希望がありましたら、ぜひご連絡ください。なお、
あらずじにもありますが、CPはコ哀または新志でお願いします(新
蘭↑志or哀もありです)。

それでは、ここまでお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。

START

光彦はその日、朝からポワーンとしていた。

理由は簡単。

今朝、待ち合わせ場所で待っていたら、突然雨が降り出した。傘を持ってきたいなかったため困っているの後からやって来た哀が「急に降ってきた慌てて博士の持ってきたやつだ」と言ったため、光彦は哀の傘に二人で入ってきたのだ。

博士の傘はとても大きくて、小学生が二人並んで入っても十分に余裕があった。

光彦は学校に着くまでずっとドキドキして、地に足が着かない気分だった。

「光彦のやつ、変なんだぜ。俺が話しかけても無視するんだぜ」

「だよな。授業中も集中してなかったみたいだもん。珍しいよね」

昼休み、周りの事など上の空の光彦はほおって置き、歩美と元太が会話するのを、コナンと哀は少し離れた場所で聞いていた。

「だってよ。どうする？灰原」

「からかい気味にコナンが聞いた。」

「あら、私は何もしてないわ。関係無いでしょ」

「へいへい。傘にいれてあげただけで“何もしてねー”もんな」

「やけにさわる言い方ね。本当の事じゃない」

哀はクスツと笑い、教室を出ていった。

哀去った事を確認すると光彦がコナンのところにやってきた。

「あの、コナン君」

「あん？何だ？」

「あの、僕、僕、その…」

何かを言おうとして口ごもる光彦。コナンは光彦の肩に手を置くとこう言った。

「光彦。悪い事言わねー。あいつだけは止めとけ。オメーの手には負えねーから」

光彦はその言葉を聞いて少し目を見開き、それからフツと笑った。

「コナン君、前にもそう言った事ありますよね。あの時は分からなかったけど、今やっと分かりました。やっぱり、そうなんですね」

「はあ！？何言ってるんだ？お前」

「良いんです。分かりましたから」

光彦はそう言うと、歩美達の話に加わりにいった。

コナンはまだわけが分からなさそうにブツブツ言っている。

「コナン君、例えば君が灰原さんの事を好きだとしても、僕は諦めませんよ。今は無理かもしれませんが、頑張ります。いつか君を追い抜いてみせます。」

光彦は、心の中でコナンにそう宣言した。

START（後書き）

更新不定期で本当にすみません。ちなみに明後日から中間考査です。受験生なのにあたし何やってんだろ？

今回はコナンが哀ちゃんの事好きだと勘違い光彦です。でも、あながち間違いじゃないと思うのは私だけでしょうか？好きとは違うかもしれないけど、コナンは哀ちゃんを他の人よりも自分の手元に置いておこうとしているように思えてなりません。

後、コナンも哀ちゃんも光彦が歩美の事も哀ちゃんの事も好きな事に気づいてるとおもうんですよねvv
みっちゃんバレバレじゃん笑

私の勝手な思い込みでしたら申し訳ないです。。。

ふるーっ様。一応光彦出してみました。いかがでしたでしょうか？

あ、忘れてました。補足です。

伝わりにくかったかもしれませんが、これは、光彦がSTARTした話だと捉えてください！

星のかがやきよ

“出会った瞬間に”なんて言うけれど……

私の場合はもつとずっと前で。

私と同じ瞳をしているあなたに、私とは誰よりも違う臭ひかりを感じた。真っ直ぐなあなたの瞳に、狂おしいほどの興味を引かれたけれど、私の想いは、あなたにはいつも届かなくて。

「いい加減にしてよ。嫌よ、こんな事」

「いいじゃねーか。いっぱいあんだろ？な、もう1個だけ」

「嫌だつて言ってるじゃない！どうしてそこまで聞き分けがないの？」

「ったくー、オメーもこのことになると本当頑固だよな」

コナンが飽きたように言った。

「あなたのために思って言ってるのよ。感謝してほしいくらいだわ」
「そう言いながらも、半分は違うという事を哀は自覚していた。」

「もう分かったよ。じゃ、研究頑張ってくれよな」

そう言つてコナンが部屋を出て行った瞬間、哀の目から涙がこぼれた。

「あなたが遠くなるのは嫌だけど、それでもあなたが幸せならそうしてあげたいわ。」

でも違うの。これは……今試作品を渡す事が出来ないのは、本当に、本当にあなたのためのよ」

自分に言い聞かせるような哀の呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

次の日も、哀は重い体を引きずって学校へ行く。

「灰原、昨日は無理矢理で悪かったな。最後まで突き放すようになってしまったしょ」

案の定、決まり悪そうなコナンが謝って来て。

「別に。あなたが悪いわけじゃないわ。私が早く解毒剤完成させればいいだけなもの。」

あなたの言う通り、研究は頑張らさせてもらっわ」

「俺も、早く組織をつぶしてみせるさ。な！」

コナンはそう言うと、屈託なく笑ったのだった。

組織の恐ろしさは分かっているだろうに。

本気でつぶそうとしているあなたはまるで私のヒーローね。

でも……あなたにはいつまでもそのままいてほしい。

それが私の大好きなあなただから。

星のかがやきよ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。大変遅くなってしまい、申し訳ありません。

謝った直後で申し訳ないのですが、次話の投稿は更に遅くなってしまいました。理由を言いますと、私は高3で受験勉強の真っ最中でございます。これまでは息抜きにと執筆をしていましたが、今回の遅さを見ても分かるように、もうそうも言ってられない時期に突入してしまいました。

受験が終わりましたら、必ず完結させますが、それまでは休載させていただきます。私事で本当に申し訳ありませんが、お許しください。

G r o w i n g o f m y h e a r t (前書き)

あんまりコ哀っぱくないです。

コナンの台詞少なすぎです。

ほぼ哀ちゃん独白状態に……汗

Growing of my heart

「歩美はトロピカルランドで結婚式したいなあ……」

「け、け、結婚、ですか!？」

「だ、誰とするつもりだよ!」

「そんなの Conan 君に決まってるじゃない! ね、Conan 君」

歩美はそう言い切って Conan の腕に抱きついた。

「ハハハ」

Conan の乾いた笑いには気付かず、光彦と元太は Conan に掴みかけらんばかりだった。

「Conan、テメー卑怯だぞ!」

「そうですよ Conan 君。僕たちはまだ小学生ですよ。それなのに、け、結婚なんて!」

“ いや、結婚つつつたの俺じゃねーし ”

「みんなの将来の夢は?」

歩美はそんな様子には気付かずみんなに尋ねた。

「俺は腹いっぱいという重食って、ヒデみたいなサッカー選手になるんだよ!」

「僕はやっぱり科学者ですね。博士みたいにガラクタばかりじゃなくて、世のためになるものをつくりたいです」

「Conan 君は?」

「俺は、探偵……かな」

“ 今は元の体に戻るのが先決だけど ”

心で思った言葉は、当然口には出さなかった。

「Conan 君は今も探偵じゃない。だって私たち少年探偵団よ! あ、哀ちゃんは?」

「そうね、もう少し、先に進む事かしら」

「先? なあに、それ?」

「あ、ほら、作文の宿題。続きが中々思い浮かばなくて……」

「もう、哀ちゃんたら！それじゃ将来の夢じゃないじゃない！でも、歩美も作文まだなの。そうだ！今日これから博士ん家でみんなでやるつよ。哀ちゃん、大丈夫？」

「ええ、じゃあ行きましょうか」

5人は博士の家に向かうことになった。

“そうね、先に進まなくちゃ”

哀が、さっき自分で言った事を頭の中で反芻していると、コナンが話しかけてきた。

「さっきの、組織と解毒剤の事だろ？」

「え？」

「ほら、先に進むってやつだよ」

「え、ええ。そんなところよ」

「んだよ、そんなところって。含みのある言い方だな」

「別に」

哀はそう言つと、歩くスピードを速め、コナンの前に行ってしまった。

“解毒剤も、作らないと。だけど……”

哀は、組織にいた頃にはなかった感情が自分の中にあることをはっきりと感じていた。

孤独と戦っていた。だけど、一人で平気だった。

夢なんてないのに、夢を探していた。

頼れるのは、自分だけだった。

それなのに、姉に会った日の夜には、一人、涙した。

姉は、私を照らす、たった一つの星だった。

だから、姉が殺されたとき、押さえきれなくなった気持ちが動き出して、初めて組織に抵抗した。

そして、逃げ出したんだ。

頼れるのは、自分だけだった。はずだった。

なのに、逃げ出したとき、頼れるのは、あなただけ。そう思った。

今では……

自分は、彼に頼りすぎているのだろうか。あなたの事、思いすぎてるのかしら。

哀は、自分が深く考え込んでいた事に気付き、思考を止めた。

よく見ると、みんなが自分を見ていた。

「哀ちゃん、どうしたの、ここにしわよってるよ」

歩美はそう言っ、自分の眉間を指した。

「ごめんなさい。ちよつと考え事してたから。作文、題名もまだだ
なっ」

「ふーん、そっか。じゃあ頑張らなくちゃね。ほら、もう博士の家
着いたし」

「ええ、そうね」

「よし、みんな！作文、頑張るぞー！」

「「「オー！！」」」

歩美の掛け声と共に、5人の手は上に高く上げられた。もつとも、
コナンと哀の手は歩美によってしっかりと上に上げさせられていた
のだが。

5人は今、机に座り、それぞれ作文を書いている。

コナンはもう書き終えたらしく、ペンを回して遊んでいる。

哀は、自分の作文用紙を見つめ、ペンを動かし始めた。

“私の人生は、逃げ出したあの日から始まったんだもの。この子達
と一緒に未来へ行くのも悪くないわ。この子達みたいに終わらない

くらいの夢をもってみましょうか”

それから哀は隣をチラリと見た。コナンは相変わらずペンを回している。

“それに、工藤君こうどうの事もね。何かの本に書いてあったみたいに、始まった想いは大切になってわけじゃないけれど……。でも、心を育てる事ハートも、未来への荷造りのひとつになるはずよ”

哀は、そう考えるとふふつと笑い、作文を仕上げた。

Growing of my heart (後書き)

皆様お久しぶりです。まず、大変お待たせしてしまった事を謝ります。すみませんでした。

ようやく受験が終わり、結果はまだ分からないのですが、取りあえず復帰しました。

ただ、執筆するのはあまりに久しぶりすぎ、文体が変わったかもしれないことはじめ、以前にもましてつたない文章、幼稚な内容になっている事を、重ねてお詫び申し上げます。

今回は、連載の中ではありますが、復帰第一作目として、多めに見て頂きたいと思います。これから、なるべく定期的に更新し、しっかりと25話まで書き上げますので、お付き合いの程よろしく願います。

それでは、次話もご閲覧いただけると幸いです。

ありがとうございました。

衝動

「ハア、ハア、ハア……」

突然、目が覚めた。特に、夢を見たわけでもないのに。辺りを見渡すと、もちろん電気は消え、外からの明かりもぼんやりとしたものだけ。

あまり、色を感じられなかった。

そんなときは決まって、自分の考えがマイナスの方向へ向かってしまふ事を自覚しているものの、そんな思考をとめる事は出来なかった。

大切なものを傷つけたくなり、扉の前に立ってみた。

でも、実際に傷つける勇氣もなくて、ただ立ち尽くすだけ。そんな小さな背中に気付いてほしい。

……ううん、何も知らないままできてほしい。

「志保も恋人の一人や二人くらい作りなさいよ！」

いつか、明美がそう言った事を思い出した。

でもね、お姉ちゃん。私は、誰かを愛する事は出来るの？

お姉ちゃんの事は、大好きよ。

だけど……だからこそ、これ以上他の誰かを愛するなんて……。

その時、ふっと手に温かいものを感じた。

“大丈夫よ。出来るわ”

そう、囁かれた気がした。

お姉ちゃんのぬくもりと一緒に、彼のぬくもりも少し、感じられた気がした。

「犯人は、あなたです！」

今日も、ひとつの事件を解決した。

犯行の動機もその結果も全てが暗いもので……。

犯人に自殺されなかった事だけが、不幸中の幸いのように思えた。

こんな事件の後はいつも決まって落ち込む自分と、いつも決まって強がる自分がいた。

“自分は、何を追い求めている？”

自分の中身はなぞだらけだ。

だけど、自分は一人ではなくて、誰かとの固い絆があると分かっているから、落ち込む気持ちも立ち直らせてくれる。

俺が、犯人とトリックを見つける事で救われる人がきつとどこかにいるから。

“あなたのやっている事で、きっと当事者の運命を変えられるわ”

“あなたが、この世界のホームズなんでしょ？”

普段は決して言わない言葉をさりげない声で囁いてくれるから。

俺にも何かを変えられるんだ。

絶望ばかり見てた過去。そこに光を照らしてくれた彼。

希望って、そこにある道のようなものなのでしょう？

進む事が出来るから、希望なのでしょう？

だったら、どこかに行けると信じてみよう。

私にとっては、あなたこそが……—

衝動（後書き）

一つの話の途中でこんなにはつきりと目線を変えるのは初めてなので、分かりにくかったら、本当にごめんなさい。

最初が哀（志保）たむで真ん中がコナン（新一）で最後のちよびつとがまた哀（志保）たむです。

これは、コ哀ですかね！？新志ですかね！？新哀ですかね！？てかそもそも両思いなんでしょうか？

だったらいいな。って、私が書いたんだけど…。

とりあえず、お互いどんどん信頼していく雰囲気にしたかったんです。

こんなんの良いのかわかんないけど。

と、とにかく！ここまでお読みいただきありがとうございます。

後、報告が遅れて申し訳ありません。私事ではありますが、大学は無事合格する事が出来ました。今までありがとうございました。

100もの扉

一歩踏み出すにはとても勇気がいるの。

だって、当たり前だった事が変わっちゃうかもしれないのって、とっても怖いでしょう……？

だけど、あの人はいつだってそれを恐れようとはしないから。その、最初の一歩を簡単に踏み出してしまっの。

ねえ、足を踏み出して、手を伸ばしたら、そこには何があるの？

辛い思いばかりして、なんでも恐れるようになっていた。そんな私でも、キラメク未来を夢見たい。

そう思えるようになったのは、彼のおかげよ。

そうしたら、私の前に扉がたくさんあることに気がつけたわ。壁じゃなくて、100もの扉が。

壁にぶつかることは、ないのよね？

だったら私も手を伸ばしてつかんでみるわ。

そこにあるのが100もの扉なのだとしたら……！

勇気と希望と愛を胸に、これからの輝く未来をずっと夢見ること、私にはできるかしら？

そっ、笑顔を絶やさなければ可以的のね。

扉を開けて、その次の扉も開けて。

そうしたら、あの人の大好きな真実の光が私にも降り注ぐから。
さあ、勇気を持って扉を開こう。

そして私はあなたと約束したの。

“あなたとの約束” その事実が私に勇気をくれたわ。

希望があふれてくるの。

雨にも風にも負けることはない。

流した涙が無駄になったりしない。

そう思うことにする。

そうしたら、力を合わせて扉を開けてくれるかしら？

そうすれば、一緒に、輝く未来を夢見て、一緒に未来に進んでいけると思うから。

100もの扉（後書き）

お久しぶりでございます、ちいです（＜―＞）

長らく小説を投稿していませんでした＞＜

すみませんm（――）m

その理由を少しだけ……

1つ前の話の後書きに書いた通り、私は昨年の春から大学生になり、一人暮らしを始めました。

それに伴う環境の変化や忙しさから、自分の趣味の時間がなかったというのが理由の1つです。

でも、より大きな理由があります…。

私は他にも趣味があつて、そのためにサークルに入りました。

しかしそこで諸問題が起きてしまい、結局私のしたい事が出来なくなりました…

すぐにやめれば良かったのですが、人間関係がとても良い所だった為中々決心がつかず…

でも今、1年間悩んだ結果、どうしてもやりたい事で、一生やりたい事だとはつきり言えるようになったので、サークル仲間にも話してやめることにしました。

そして、やりたい事ができる団体に改めて加入する予定です！

自分の気持ちが決まった事により、余裕が出来て久しぶりに小説を書くという事を思い出しました笑

といっても実はこれ、リハビリ小説ではなく、1年弱前に書いていたものを発掘したものです（汗）

とりあえず投稿だけしようかなと…

これからもまだ忙しい事に変わりはないので、すぐに続きを書く事は出来ないと思いますが、少しずつ頑張っていくので、これからもよろしく願います（＜人＞）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8444e/>

An Earnest Desire

2010年10月10日05時31分発行